

房総半島中南部を訪ねて : 夏季巡検報告

著者	伊藤 誠二
雑誌名	静岡地学
巻	50
ページ	29-32
発行年	1984-11-18
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00025521

房総半島中南部を訪ねて

伊藤 誠 二*

静岡県地学会の夏季巡検が、8月18日～20日の3日間にわたり、房総半島中南部で行われた。今回の巡検の案内者は、小竹信宏氏（静岡大・地球科学教室）でした。

8月18日の朝、県内各地から足柄サービスエリアに集合した参加者は、3台の車に分乗し、一路、三浦半島、久里浜へ向った。久里浜から、東京湾フェリーで対岸の浜金谷へ渡った。フェリーから見る東京湾はかなり汚れていたが、海上を渡る風は心地良かった。国鉄内房線の浜金谷駅で和田氏と合流し、そこで今回の巡検の案内、日程説明などが行われた。そして、いよいよ巡検会が始まった。なお、巡検は、3日間とも残暑の眩しい陽ざしの中で行われ、参加者全員が水分補給に忙しかった。

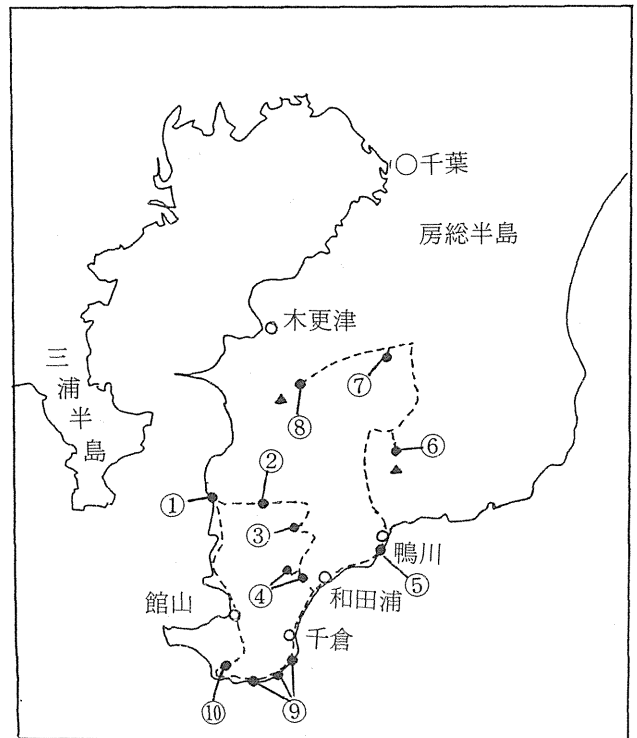


図1 見学位置

〔1日目〕

① HK-tuff と鋸山向斜（後期中新世）

昼食後、浜金谷のすぐ南の明鐘崎付近の海岸におりた。ここには、笠貝、タマキビなどの海棲動物が沢山見られ、ついつい地層を見るより磯遊びをしたくなってしまふ。ここに露出している地層中には、極めて多くの火山砕屑物（スコリア、白色細粒凝灰岩、ゴマシオ状凝灰岩など）が挟まれている。この地層は、三浦層群と呼ばれる地層である。この地層中には、房総半島から三浦半島にかけての広い地域にわたって追跡されるスコリアとゴマシオ状の tuff の組み合わせで特徴づけられる HK-tuff と呼ばれる凝灰岩鍵層が挟まれている。参加者は、案内者が用意してくれた巡検のパンフレットを片手に、この凝灰岩を捜した。

HK-tuff を見つけ、海岸沿いに南に向かって歩くと、初め南側に傾斜していた地層が、しだいに傾斜をゆるくし、北傾斜に変わっていくのが見られる。海岸に沿って走る国道127号線の方を眺めると、向斜構造（鋸山向斜）がよく観察された。また、この向斜軸の南側でも HK-tuff を見つけることができ、向斜構造を確認することができた。

*浜松女子商業高等学校

② 保田層群

保田層群が露出している鎌南町保田～横根付近（地図参照）の崖を車で走りながら見る。横根の所に見られた大きな露頭の近くで車を降り、露頭の観察をした。赤味を帯びた岩石であるが、露頭全体が風化しており、層理など堆積構造も認められない。説明によると、保田層群は、どこでも層理が不明瞭であり、年代など未だ解かっていない多くの点があるそうである。

③ 嶺岡帯（平久里付近）の超塩基性岩

南房総のほぼ中央を南北に走る道路を南下すると、平久里という部落がある。この付近には、房総半島の基盤である嶺岡層群（嶺岡帯）が分布している。私たちは、平久里にある採石場に車を止め嶺岡帯の見学をした。ここで見られる石は、たいへん黒々としており、手に取るとずっしりとした重さを感じられる。一部、蛇紋岩化しているが、カンラン石・キ石などの結晶が多く含まれており、超塩基性岩だということがよくわかる。また、杏仁状のカルサイトの結晶も見られた。

④ 石堂層群（後期中新世）・豊房層群（中期更新世）

さらに南下すると嵯峨志という所がある。この付近には、石堂層群と呼ばれる地層が露出している。石堂層群は、灰白色～灰色の凝灰質シルト岩からなる。この地層中には有孔虫などの石灰質殻をもつ化石はほとんど含まれておらず、このことは炭酸カルシウム補償深度（CCD）付近か、それより深い（約 4,000 m 以深）海底に堆積した地層を意味しているとのことである。

さらに南下した上ノ原付近には、豊房層群と呼ばれる灰白色の泥質細粒砂～細粒砂からなる地層が見られる。この地層中には、先の石堂層群とは異なり、石灰質殻を有するツノガイ・有孔虫等が比較的多く含まれている。この地層は有孔虫群集の解析などから大陸斜面上部（600 m 付近）に堆積したもののらしいとの解説がされた。

〔2日目〕

⑤ 嶺岡帯（鴨川付近）の枕状溶岩

早朝和田浦の漁港で昨日捕獲された鯨（ツチクジラ）2頭の解体があると聞き朝食前全員で見学。小さなものと聞いていったが、近づくると長さ 10 m もありそうで、漁師がなぎなたを思わせる刃渡り 50 cm はありそうな砲丁でザックリと皮を切る。20 cm もあろう皮下脂肪のついた皮をワイヤーウィンチで引張るとベキベキと剥がれる。血液など体液は、風呂水をおとす様に音をたてて流れでている。クジラ保護協会の人がいいたら卒倒したことだろう。

今日も暑い。今日最初の地質見学地は、鴨川漁港付近である。ここは、昨日見た東京湾沿いの内房の海岸とは、たいへん様相を異にし、波もたいへん荒かった。ここは、釣をするには好適地らしく、又日曜日とあって多くの釣人がいた。そういえば宿のかもいにはイシダイ、クロダイ、メジナ、シマアジなどの魚拓がずらりと並んでいた。

まず最初は、海岸からやや離れた大きな露頭を観察した。ここには、黒々とした玄武岩が見られた。よく観察をすると、層理は不明瞭であるが、枕状溶岩と枕状角レキ岩の部分があることが認められる。海岸につきでた弁天島でも、枕状溶岩と枕状角レキ岩とが見られた。弁天島から 200 m 程北側に離れた荒島では、上位の保田層（凝灰質シルト質砂岩）が見られた。両者の関係は不整合と考えられている

るが、ここでは、その関係は海面下のため確かめることができない。

小竹氏、和田氏の説明によると、嶺岡帯には、微晶斑レイ岩、蛇紋岩なども見られるようで、昨日見た超塩基性岩ともあわせてみると、嶺岡帯とは、昔の海洋底が陸地に顔を出している部分であるということが納得される。

⑥ 黒滝不整合（鮮新世）

清澄山の北側に、小櫃川^{おびつ}の支流、析木沢がある。私たちは、その沢の途中で車を止め、清澄山方面へと向った。途中の林道わきは、極めてよく岩石が露出している。最初は砂の多い砂泥互層、途中からは塊状の緑灰色シルトが見られ、よく見ると、微小な二枚貝が見られる。いずれも、上総層群の黄和田層である。緑灰色シルト岩がしばらく見られ、しだいに凝灰岩が挟まれてくるのがわかる。この地層は、北に20~30度で傾斜している。林道のトンネルを抜けると、右手下方に滝が見えた。これが黒滝である。その滝の上流の沢に降り、滝口に集まった。案内者の説明では、今、不整合面の上に立っているとのこと。不整合を断面方向から見たことは何度かあったが、このように不整合面を水平方向に見たのは初めてであり、参加者の多くも不整合という実感がわかかなかったようである。この不整合の下位には、三浦層群安野層が見られる。

⑦ 川谷^{かわやつ}の貝化石（柿ノ木台層）

房総半島のほぼ中央（久留里線久留里駅近く）の川谷では、暗青灰色の泥質細粒砂岩が見られる。この砂岩中には貝化石が点々と見られる。しかしここに見られる貝類は、他の多くの場所で見られるshell-bedのような貝殻がはき集められたようなものではなく、すべてが合弁で、自生的産状を示す。主な貝化石としては、*Lucinoma spectabilis* (YOKOYAMA), *Conchocela disjuncta* GABB, *Solem, a sp.* である（鈴木、1983 MS）。いずれも、この時代の他の場所のものに比べ、たいへん大型化している。

⑧ 市宿^{イキヅク}層のクロスラミナ（中期更新世）

鹿野山の東方市宿には、市宿層と呼ばれる粗粒砂岩からなる地層が分布している。そこにある採砂場の露頭を見学した。ここで見られるものは、アッと驚くほど大規模で見事なクロスラミナである。参加者全員が、この見事なクロスラミナに感心し、写真を撮ろうとするが、あまりの規模の大きさに、後ろへ後ろへと後退せざるを得なかった。粗粒砂中には、*Pectenidea*, *Macoma spp.*, *Flugoraria sp.*, *Glycymeris sp.* などの貝化石が見られる。いずれも、砂とともに流れ込んで堆積したものである。

〔3日目〕

⑨ 南房総（千倉~野島岬）の海岸

房総南端に近い千倉~塩浦にかけての海岸には、千倉層と呼ばれる砂泥互層を主体とし、火砕岩を挟む地層がある。ここには、数多くの、そしてたいへん様々な生痕化石が見られる。ウニがはいまわったと思われる生痕化石は、とても見事なものであり、博物館に陳列するに値するものであった。また、*Zoophycos*, *Chondrites* と呼ばれる生痕化石も数多く見られ、いずれも見事なもので、参加者の多くが写真を撮ったり、生痕化石の見られる岩石を採取したりした。

野島岬には、火山角礫やスコリアを多く含む地層が露出している。今から61年前の関東大震災の時、この付近は約4m隆起し、当時の海底が顔を出して、島（野島）と陸続きになり、今の形になったと

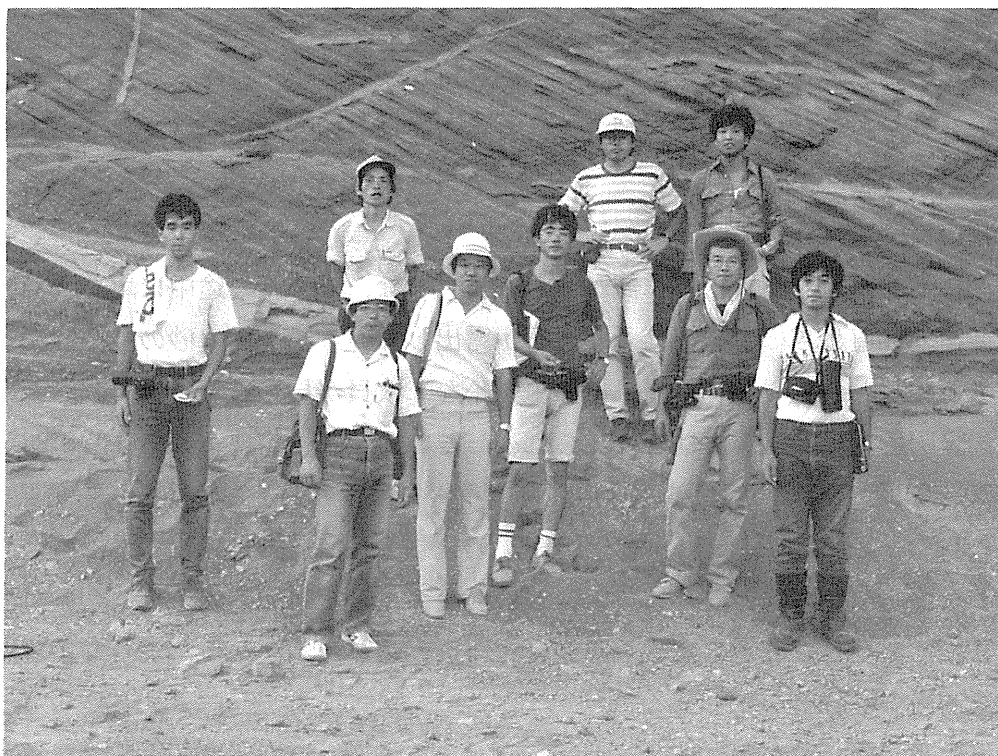


写真1 市宿層のクロスラミナの前で記念写真（藤井恒哉氏撮影）

いう。

⑩ 沼層

沼層あるいは沼のサンゴ礁という名は、多くの人が聞いたことがあると思う。この地層は、今から約 6000 年前の縄文時代のいわゆる縄文海進の時の堆積物からなり、館山を中心とした房総南部の海岸付近に分布している。今回は、残念ながら一カ所でしか見ることはできなかったが、そこでは下位の千倉層と不整合で接しているのが観察された。不整合面では、千倉層のシルト中に boring-shell が孔をあけているのがよく見られた。約 6000 年前の堆積物が、かなり高い所（海拔約 20 m）にも見られることから、房総南部の隆起量の大きさがうかがえる。

おわりに

3日間とも、たいへん好天にめぐまれ、房総半島中南部で、特に有名な地層、化石、生痕化石などが見られ、また多くの岩石などが採取でき、多くの収穫を得ることができた。暑い中、3日間も終始適切な指導をして下さった小竹氏には、厚く御礼申し上げます。参加者、加藤、久保田、小竹、斉藤、藤井（恒哉）、藤井（恒人）、八木、和田、伊藤。

文 献

鈴木孝雄（1983 MS） 房総半島柿ノ木台層の古生物相 静岡大学卒業論文